

史料紹介と研究

海図「大琉球那覇港之圖」に描かれた首里城

今井 健三

はじめに

明治七（一八七四）年五月海軍省水路寮刊行の海図、「大琉球那覇港之圖」（図1）（以下、「那覇港之図」と略記する。）に琉球王国の王府、首里城が描かれている。経緯度座標と縮尺で構成された海図の紙面には三つの主要要素が表現されている。一つは陸と海の境を示した海岸線と最も潮が引いた時の水深ゼロを示す低潮線、二つめは各地点の海の深さ、水深といい、三つめは沿岸の目標物である。海岸線と低潮線は海図のベースラインを成し、水深は自船の喫水に応じた安全な航路を決める海図の命ともいえる情報である。目標物はレーダーやGPSがなかった時代、船位を測定するうえで必須の目印となる。

ここでは「那覇港之図」に記載された首里城が表現された意図を読み解くとともに、本図以外の十九世紀の英米版水路誌や明治期日本水路部版水路誌等での首里城記載の採否についても触れたい。

一 南島測量の経緯と琉球群島の海図整備

図1が刊行された背景を簡単に述べる。明治四年十一月に発生した台湾事件を契機に台湾への出兵に際して、創設間もない海軍省水路寮は艦隊派遣に備えるため途中の奄美、琉球方面の英、米版海図を入手し覆版するとともに、独自の補足的な測量の必要性から南島測量の大事業に着手した。明治六年二月、水路寮の柳栖悦権頭は主要な測量士官と測量艦二隻を率いて奄美、琉球方面の測量のため品川湾を抜錨、過酷な条件のもとで水路測量を実施し

て七月品川湾に帰着した。水路寮はその成果をもとに同年十一月、「八重山全島圖」を皮切りに翌明治七年二月に「八重山島石垣港圖」と「琉球群島西部慶良間海峡圖」を、五月に「大琉球那覇港之圖」を、六月にはそれらを集大成した「琉球群島之圖」を、八月に「琉球國運天港之圖」を刊行、完成させた。（奄美方面を除く）。

二 「那覇港之図」における首里城の図上位置と略記

図1の右端のほどに首里城という文字を枠で囲み、首里城の図上位置を明確に示し、その右横の囲みには「首里城略記」が漢文で書かれている。その冒頭に首里城は那覇砲台から真東に三里離れたところにあると記載、明治初期の日本海図は英国海図を模範としており、一里は一マイル（Nautical Mile）＝約一、八五二mなので首里城は那覇港北砲台（天測点⊕）から東に約五・六kmの位置にあることがわかる。

略記には王府は国王が政治を司る場所であり、城壁の周囲は山をなし、扁額がかかった中山國門、歡會府門、漏刻殿門、奉神每門を順次説明し周囲を石壁で囲った正殿、嶺殿は二層の南北八列で構成、これらは漢制に習い、王以下の官位の順に立派な屋敷が配置、周囲をめぐらされた石垣は大風を防ぎ、瓦屋根は首里や那覇以外にはなしと首里城のいかに美しく立派であることを記述している。このような略記は通常、水路誌に記述される内容である。あえて海図に記載した意図は明治五年、明治政府は廃藩置県によって琉球王国を琉球藩としながらも琉球王国はまだ厳然と存在するなか、翌六年春、品川湾から万里の波濤を越えて初めて琉球に赴いた水路寮柳栖悦権頭は王国の歴史と伝統文化を目的の当りにして敬意を表しての思いからであろう。

三 首里城を描いた対景図と視認方位の疑問

図1の右下枠の中に海上から那覇港の景観を描いた対景図三図が図載され、一番上の対景図（図2）は海上から首里城を遠望し描いたものである。対景図とは船が航行中、目的の沿岸に接近して港に入港する際に、船上か

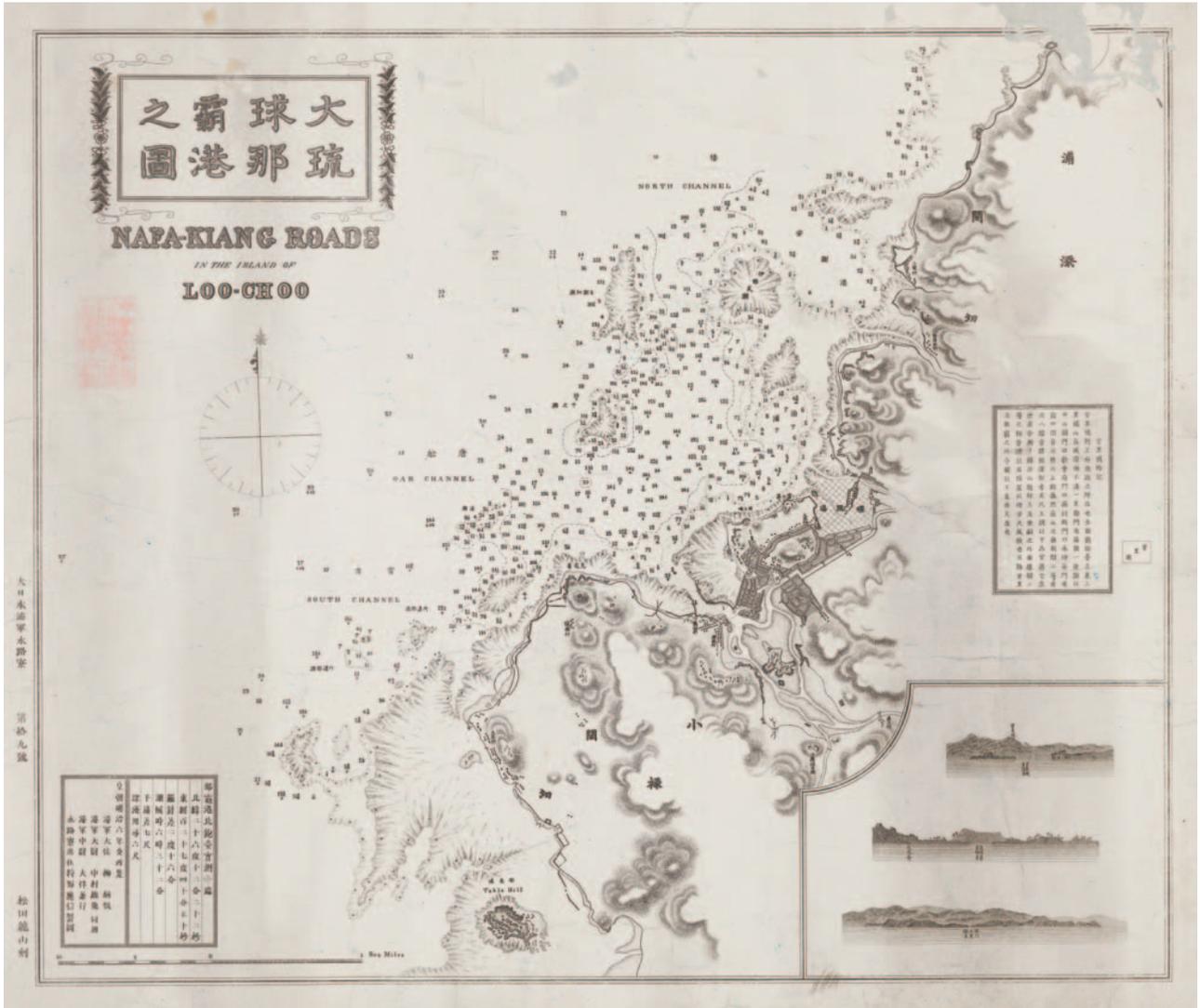


図1 「大琉球那覇港之圖」縮尺1：27,151を約32%に縮小（東京大学史料編纂所所蔵）

記載してあるが、明治十年以降の対景図には目標物を何度、何マイルに視た描画位置が記載されるようになる。「首里城東微南」とは首里城を磁針コンパスの三十二方位に分割した磁北から九つ目の方位、角度で表すと磁北から約一〇一度方向に視たという意味である。しかし、この視点方位

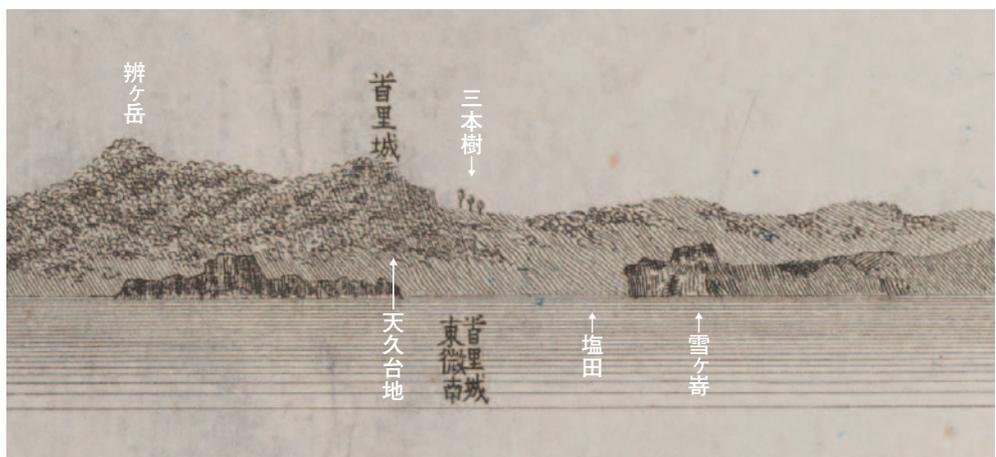


図2 図1に図載の那覇港泊地から首里城を望んだ対景図

ら目印となる山頂や岬の突端、顕著な建物などの発見を容易にするために、海上の任意地点から陸岸の地形や目立つ物標等の対景を目で観察しその特徴を分かり易く誇張して描いた立体図である。

明治初期の海図には対景図の描画位置の記載がなく、単に「首里城東微南」と目標物とその方位のみを

が正しいとすれば、海図上で作図をすると中央右の崖の先端、雪ヶ寄と首里城が一線上に並ぶことになる。しかし、この対景図は視点から見て首里城と前面の天久台地の稜線の中ほどとほぼ一線上にあることから「首里城南東微東」磁北から一二二度の誤りではないかと考える。詳細は省くが今回、「那覇港之図」と二万五千分一地形図の図上作業を重ねて判明した。

対景図に描かれた地形、地物を観察するとまず中央の首里城は尾根の東端の山頂に位置し、樹木に囲まれ首里城の注記の下に城壁のような石垣（標高約一五〇m）が見え、左に向かう稜線の頂は辨ヶ岳（標高一六五m）であろう。城壁から右に延びる尾根の途中に三本の樹木が描かれている。対景図作成者は周囲の景色から三本の樹木が際立った目印として目に強く映ったのであろう。この著樹から右の緩やかな稜線は奥武山に続く山波である。

海岸に目を移すと右側は岩崖が切り立った台地上の形をしており、この先端は雪ヶ寄で、その右は浪上崎へと続く台地が描かれ、雪ヶ寄の左は塩田が広がりその先は泊村に至る。その先の黒いごつごつした平らな岩盤状の地形は天久台地崖下前面の海岸地形と思われる。その背後には英米の航海者達が那覇港に入港する際に目印となった白い墳墓群が斜面に広がる天久台地の輪郭が認められる。この対景図で目立つ目標物としては、首里城、辨ヶ岳、三本の著樹、雪ヶ寄と塩田から続く特徴ある前述の海岸地形とその背後の天久台地が確認できる。

四 英米版および日本版水路誌にみる首里城の扱い

(1) バジル・ホルルの水路誌

一八一六年イギリス海軍ライラ号の艦長バジル・ホール大佐が琉球調査の作り作成した水路誌「THE GREAT LOO-CHOO ISLAND AND THE CHARTS OF NAPAKIANG, AND MELVILLE」の中に那覇港泊地の記述がある。港に接近する目標物としては①浪上崎の頂にある寺院、②アビー崎（先花寄）、③キャプスタンホート（ホール岩）などが記述されているが首里城の記載はない。しかし水路誌の付図として那覇港全体を描いた略式海図

NAPAKIANG ROADSには目標となる数々の岬、岩の図示とともに Kings Palace という注記と首里城の建物が記載され、「那覇港之図」と比較すると位置はほぼ正確に描かれている。

(2) ペリー提督の水路誌

合衆国海軍大尉ウィリアム・L・モリー等の日本遠征隊士官が一八五七年五月にまとめペリー提督に提出した「水路誌と航法上の発見」の中に那覇港の内港、外港の針路法やバジル・ホルルの水路誌に見られる目標物についても書かれているが首里城についての記載はない。

(3) 「南島水路誌（巻二）」（明治六年十一月）海軍省水路寮刊行

南島測量の後に柳橋悦が編集し石川洋之助が校閲した琉球群島全志と称する文中には琉球王国の歴史、王尚氏の政治体制や文化、風俗、自然、産物、航路記が詳しく記述され、水路誌というよりはむしろ琉球地誌といえる。那覇港の景況はバジル・ホルルの水路誌に見られる目標物等の記載はあるが、首里城に関する記事は「中山一帯亦高カラス」とあるのみである。

(4) 「寰瀛水路誌・第一巻下」（明治十九年三月）海軍水路部刊行

首里城の位置や建物、正殿や他の建物の美しく立派なことについて記載されているが、那覇港の入港目標物としての記載は見られない。

(5) 「日本水路誌（第式巻）」（明治二十七年七月）水路部刊行

那覇港の目標物の項に、「港ノ東方内地ニ聳ユル高山ハ辨ヶ岳最高ク尖形ニシテ松樹之ヲ覆ヒ高サ五九八呎其直西ニアル山ハ首里城ニシテ高サ四九六呎樹間ニ城壁ヲ現シ頗顕著ノ観アリ」と首里城が大変顕著な目標物であることが明確に記載されている。これを反映して明治二十八年二月刊行の海図第二五九号「那覇港」の図中にも辨ヶ岳の直ぐ西に、旧王府の建物や樹木が城壁で囲まれた首里城が図載され、対景図にも辨ヶ岳と首里城が対で描かれている。

まとめと課題

海図「大琉球那覇港之圖」に描かれた首里城の位置および首里城略記そし

て首里城を描いた対景図の表現意図について総括したい。一つは明治六年春、柳らが那覇港を測量当時、首里城が琉球王国、王尚氏が政治を司る王府として機能し、その象徴的な王宮であったことを意識した意味合いが大きいと考える。二つ目は首里城が那覇港入港時の好目標物であることが明治二十七年刊行水路誌の記述および明治二十八年刊行の海図第二五九号「那覇港」の対景図等の表現から明確に確認できた。したがってこの二つの表現意図から首里城が「大琉球那覇港之圖」に描かれたものと考ええる。

課題として、中西良夫「一九七二」⁵⁾は「大琉球那覇港之圖」を論じた記事のなかで、図の「右下には英版から採用した対景図が添えられている。」と記述している。本図の表題記事に対景図は英版から採用したという記事はないが、欧文表題が「NAFAKIANG ROADS」となっていることから表題も含めて英版海図からの部分採用による覆版が十分考えられる。十九世紀中頃以降に刊行された英版の那覇港海図を調査し、今後この点を明らかにしたい。

注

- (1) 明治四年十一月、宮古島島民が台湾南部に漂着した際に五十四人が殺害された。
- (2) 明治四年九月兵部省海軍部水路局として創設、明治五年十一月に海軍省水路寮に改編。
- (3) 水路部編一九一六年『水路部沿革史(自明治二年至同十八年)』水路部
- (4) 黒嶋 敏、二〇一九年「古琉球期における那覇港北部の景観」『東京大学史料編纂所付属画像史料解析センター通信』第八十六号 四〇〜四一
- (5) 中西良夫、一九七二年「海図に見る沖縄―海図の現状と水路測量史―」『地図』十卷二号 一〜一九 日本国際地図学会

【付記】なお、本稿は科学研究費補助金「南西諸島における海上交通の復元的研究―「帆船の時代」の「歴史的航海図」―」(基盤研究(B)、研究代表者・黒嶋 敏)による研究成果の一部である。

(元海上保安庁海洋情報部)

史料編纂所「二〇二一年カレンダー」のご案内

今回は「病氣と医療」をテーマとして、江戸期の史料を掲載しています。表紙はコレラの治療方法を庶民へ示した幕府触、一・二月は文久二年(二八六二)の麻疹流行時に作成された錦絵、三・四月は奏者番森川俊知が將軍からの病氣見舞いの使者を務めた際の手留、五・六月はオランダ出身の軍医アントニウス・ボードウインの講義録、七・八月は「向山誠斎雜記」から歴代將軍の疱瘡感染に関する記録、九・十月は麻疹への対処を示した錦絵、十一・十二月は医学館教授池田独美の記した医学書、裏表紙は麻疹除けとして人気のあつた源為朝の錦絵となっています。

体裁はA4判中綴じ(上下見開きA3判)のカラー印刷で、一部五〇〇円にて東京大学コミュニケーションセンター(史料編纂所向かい)で販売する予定です。(史料編纂所広報委員 荒木裕行)

